

ジャワ語で精霊や幽霊との遭遇について語るとき

三 宅 良 美

Talking about encountering *lelembut* ‘spirit and ghost’ in Javanese

Yoshimi MIYAKE

ジャワ語は、国語インドネシア語で統一されている多民族国家インドネシアの最大の民族、ジャワ人の言語であり、話者は1億人を超える。文法構造は、西インドネシア型であるため、本来マレー語であるインドネシア語の文法構造にやや近いが、お互いに理解が可能な言語ではない。さらに、ジャワ語は、3段階に別れる複雑なソシオレクトをもっており、とりわけ上位言語を操ることは、伝統上の上位階級の人々や伝統芸能の専門家しかできなくなっている。

本稿は、ジャワ人が精霊や幽霊との遭遇について語る際にどのような動詞を使用して語るかについて論じるものである。語る人の動詞の選択、また、voice（態）の選択は、精霊や幽霊の種類および、経験の頻度により決定される。この研究は、ジャワ語の情報構造についての一連の研究のひとつとして始まったが、その後、Du Bois 1986により議論された儀礼の言語のエヴィデンシャリティーの問題に発展した。本論は、精霊・幽霊との遭遇体験のような、一見事実とは言い難い事象にどのような validation が行われるかという問いに答えようとするものである。

This paper will discuss the use of the choice of verbs in Javanese narratives on their experiences of encountering ghosts/spirits.

Studying the structure of Javanese narratives on their experience leads to a question about the narrator's choice of verbs. Depending on the knowledge and proximity toward mysterious objects such as ghost/spirit, the narrator differentiates voice and aspects of the verbs. The diversity of the experiences of a variety of ghosts and spirits is reflected in the choice and form of verbs. I will demonstrate the verbs, tense, aspect of modality of each of the verbs used in narratives on encounters with different spirits/ghosts.

The data comes from 20 Javanese stories of experiences of encountering ghosts or spirits, generally called *lelembut*. Two of them come from narratives by my acquaintances while others are from Javanese weekly magazine *Djaka Lodang*, which has three full page article *jagading lelembut* ‘lit. the world of ghosts’, in which the writer narrates his/her experience of encountering ghosts/spirits every week.

イントロダクション

Du Bois 1986 は、神話や儀礼の言語のエヴィデンシャリティーについて、レヴィ＝ストロースを引用し、神話の言語は、それ自体が、「真実として validate」されているもの、すなわち、精霊や幽霊がそこにいること、そうした存在に出会うことは self-evident、自明のことだと述べている。「自明であること」はすでに「自明」であるから、証拠や背景の説明は必要ではない。さらに、Du Bois は、言語学的視点から、神話や儀礼の言語が‘神秘的な’事象を‘自明’のものにするには言語的なストラテジーが必要であるとし、そのストラテジーを分析している。たとえば、主体の曖昧性、時間と空間の曖昧性、理解のできない言語形態などがそのストラテジーの例である（Du Bois 1986）。

本論は、インドネシア、中部ジャワ、Jogjakarta で出版されている、ジャワ語で書かれた、週刊誌 *Djaka Lodang* に毎号3ページに渡って掲載されている記事 *Jagading lelembut* 「精霊・幽霊の世界」のうち、20の精霊、幽霊に出会った経験の物語から収集した。さらに、著者自身の二人の友人およびその家族から同様の経験を書いてもらった。

Lelembut (精霊・幽霊) の世界

Jagading Lelembut 'The World of Spirits'



1. Lelembut ～精霊・幽霊～の世界

ジャワの人々に、神秘的な存在との遭遇の経験に尋ねると、多くの人々はそうした経験があると答える。Jagading Lelembut の物語の進行は次のパターンである。

1. 自己紹介：氏名は明かさない。住所など、頭文字のみで示す。
2. 出逢いの状況：どんな精霊と出会ったのか。その精霊は何をしたのか。
3. 終結（精霊・幽霊との別れが語られる）：コミュニケーションはまだ行われているのか？現在はどうなのか。

精霊，幽霊の種類は多岐にわたるが次のような軸に基づいて分類できる。

1. Lelembut の種類

人間に近い ← 人間に程遠い →
すでに他界した家族の成員

大木の周囲などにすまう精霊たち
女性（若い女性，老女） 暗闇から突然現れる怪物
その地に，かねてから住んでいる霊
歴史的民話の登場人物（群） 火，煙，音，など

1. Lelembut との遭遇形態と動詞

Lelembut の仕方，Lelembut の種類によって，主に次の4つの動詞が使われる。

1. *ana*
exist ‘いる，ある’

2. *keprungu*

to hear ‘聞こえる’ ← *kerungu* ‘to hear 聞く’ ←
rungu ‘to listen to’ 聴く

3. *diweruhi*

PASSIVE-to get to know ← *weruh* 知る

4. *diwedeni*

PASSIVE ‘to threaten, ← *wedeni* 怖がらせる, 脅す’

次のセクションにおいて，それぞれの動詞について例文を出して説明する。

1. Existential verb 存在動詞 *ana* ‘ある，いる，あった，いた’

出会いが一度で，しかもそれが視覚的なものであった場合，その出会いを，話し手・書き手は，存在動詞 *ana* ‘いる，ある，いた，あった’ を使用して描写する。[～を見た] という視覚の動詞がここに不在であることは指摘しておくべきである。

例文 ナラティブ1. Simbah Pikun 見知らぬ老女との出会い

(1) Tanpa dingerteni sangkan paraning dumadi,
without di-reach meditation

ngerti-ngerti **ana** simbah pikun.
came to know there is grandma old

Rambutu diore meh sabokong dawane.
hair-e done almost around waist

Sandhangane lumrah pawongan Jawa,
clothes ordinary maid Javanese

jaringan lan nganggo kemben,
wearing and wear kemben (chest wrapper)

Klambine kebaya, nanging ora dibenikake.
outfit kebaya but NEG. di-hook

The outfit is *kebaya*, but the hooks are not closed.

「瞑想が終わったかと思うと知らず知らず老女がそこにいる。髪が腰のところまで下りていて，着ているものは普通で，ジャワの女中のような格好だ。胸巻の上にクバヤ（というインドネシア伝統服）を着ているが，ボタ

ンをかけていない。」

ナラティブ 2. 夜道で不思議な女に出会う。

(2) **Ana** wong wedok rambute diore,
 There is woman hair-def. down
 klambine sarwa putih,
 Clothes bright white

tangane ngawe-awe.
 hands waving

‘There is a woman whose hair is down, in white clothes, and her hand waving’.

「髪をざんばらにして白いきものをまとっている女がこちらに手を振っている。」

ナラティブ 3. 奇妙な棺桶

(3) **Aku** krasa yen ana swara gebrubug lan angin
 I felt if there is loud sound and wind
 sumiyut, lan njur mak byar lampu
 fast then-after that suddenly lamp
 kamarku urip
 room-my turn on
 ‘I felt that there is loud sound and wind….’

「大きな、風が吹く音があるように感じると突然部屋の明かりが付いたのだ。」

2. 視覚動詞 *kprungu/kerungu*

聴覚動詞 *kprungu* ‘聞く’ は、原型動詞 *rungu* ‘(注意深く) 聴く’ からの二次派生形である。

Rungu->kerungu->keprungu への3段階の発展についてはいままで具体的な研究がない。*Lelembut* との出会いに使われる動詞の研究が、この研究の出発点になる可能性がある。

2.1. *rungu*

接頭辞のない原型 *rungu* は (5) (6) のように、「注意深く聴く」、「音楽を聴く」というコンテキストで使われる。

(5) **Aku** *rungu* critamu wae
 I listen to story-GEN.2nd p.p. only
 ‘I am just listening to your story’. 「あなたの話をちゃんと聴きますよ。」

命令形

(6) **Rugokna** critaku.
 Listen IMP story-GEN.1st p.p.
 ‘Listen to my story’. 「私の話を聴いてください。」

2.2. *krungu*

一方、「受動態的」なマーカーである接頭辞 *ke* を付けた場合、一般の「聞く」の意味を帯びる。

(7) **Krungu** pamite bojone, Watiyah mung manthuk.
 hearing bye spouse-e Watiyah just fall asleep
 ‘After hearing that her husband was going, Watiyah just fell asleep.’

「夫の、「出かけるね。」という声を聞いて、(妻の) ワティヤはただ眠りに落ちた。」

(8) **Ing** tengah-tengahing sasi Desember 2006,
 in middle month December 2006

penulis wus ora **krungu** kabar
 writer already not hear news

ana wong diwedeni ing Rt. 02.
 there is people threatened in Rt.02

‘In the middle of December 2006, writer has not heard any news that there has been somebody threatened in Rt. 02.’
 「2006 年 12 月にはもはや著者（私）は、Rt.02 境界で怖い思いしている人がいるとは聞いていない。」

(9) **Apa** maneh yen **krungu** guyune
 what more when hear laughing -ne

mrinding tenan.
 feeling cold really
 (In front of a mysterious old lady)

‘What’s more, when hearing her laughing, it is really chilling.’
 「(奇妙な老婆の前で) さらに、その笑っている声を聞くと本当にゾッとするのだ。」

2.3. *keprungu*

さらに、もうひとつの接中辞 *pe* を加えて *keprungu* とした場合、「耳に入ってくる」「聞こえて来る」「突然聞こえる」となると考えられる。*Lelembut* との遭遇の際に聞こえてくる奇妙な音などは、この *keprungu* をつかって表現される。

(10) **Sing** paling kerep **keprungu** suwara wong
 that most often heard sound people
 ndhodhong lawang.
 knock door

‘What is most often heard is the sound of people knocking the door.’ 「もっとも頻繁に聞こえるのは、人が扉をたたく音だった。」

(11) Yen dibukak lawange,
when di-open door

ora ana apa-apa.
NEG. exist things

“When the door is opened, there is nobody.”

「扉を開けると誰もいないのだ。」

(12) Lamat-lamat keprungu swaraning angin
soon heard voice-DEF wind

kang prehahe saka mburi sekolahan.
that come from back school

‘Soon heard the voice of wind which came from the back of the school.’

「しばらくすると学校の後部からやってくる風の音が聞こえてきた。」

3. *Di-weden-i* ‘脅かされる’

なんども *lelembut* とコミュニケーションしている話し手・書き手は, *wedi* ‘怖がる, 恐れる’ の passive causative 型を使用し出会いを表現する。

(13) Kula niki nek mung
1st person this when only

diwedeni memedi ten ngriki
threatened memedi in here

empun kerep.
Already often

‘I am one who is often threatened by memedi often.’

「私は、ここで memedi に何度も脅かされています。」

malah ngantos memedi-ne niku
even to the point memedi-ne dem.

apal kalih jeneng kula.
remember with name 1st.P.P.

‘So that even the *memedi* already remembers my name.’

「Memedi が私の名前を覚えているくらいまでになりました。」

4. *Di-weruhi* をはじめとした受動態

上記の *di-wedeni* ‘脅かされる’, 以外に次の動詞が見られる。これらはすべて受動態の接頭辞 *di-* を持つ。

表 1 受動態動詞

1. *di-kandha-* (k) *ake* : 受動態マーカー *di* + *kandha* 語 + 他動詞マーカー *-ake* ‘語りかけられる’
2. *di-eling-ake* : 受動態マーカー *di* + 注意する + 他動詞マーカー *-ake* ‘注意を喚起させられる’
3. *di-weruh-i* : 受動態マーカー *di* + 知る + 他動詞マーカー *-i* ‘知り合いにさせられる’

話し手, 書き手は *lelembut* との関係がもっとも近くなったときに *diweruhi* ‘知るの受動態’ で表現している。また, *memedi* という, 人間に似た怪物を描写するとき, 書き手は *di-kandha-kake* ‘語られる’ と述べている。

上記の 4 つの動詞群と出会いの特徴, *lelembut* の種類との関係は次のとおりである。

図 1 は, 話し手・書き手と *lelembut* との距離を縦軸に, 動詞の種類を横軸にしたものである。さらに, *lelembut* の性質——人間に近い, 遠い——をも考慮に入れた。*Lelembut* が祖霊だったり, 何度も話したりする精霊であるときには, *weruh* ‘知っている’ という動詞を用い, 両者間が近い関係にあることを表している。一方, 学校に出没する霊は, その声, あるいは物音, 風の音が *keprungu* ‘突然聞こえてくる’ という動詞で表現される。さらに, 棺桶などの *inanimate*, 森であった見知らぬ老女などとの体験は, 存在動詞で語られる。

結論

本稿は, 儀礼の言語とその *evidentiality* についての Du Bois 1986 の研究で使われた ‘validation’ をキーワードとして, 動詞の選択と態について考えた。ケーススタディーとして, ジャワ人が *lelembut* と呼ばれる一連の精霊・幽霊と出会った経験をどのように語るかを, 語り手や書き手が使用する動詞に注目して考察した。その動詞は, 存在動詞から聴覚動詞, さらに, 脅す, 知る, の受動態に発展していく。話し手, 書き手は, 「見る, 見た」の視覚動詞を使わずにその代わりに *ana*, すなわち存在動詞を使用する。一方, 聴覚動詞は多く使われており, 多くの *lelembut* との遭遇が聴覚的な体験であることを示唆している。他界した祖父, 知り合いなどの霊からは,

表 2. Lelembut の種類, Lelembut との遭遇形態と動詞との関係

Verbs/Variations 動詞	English 英語訳	Object of experience	Name of spirit/ghost 霊・幽霊の名称	特徴
ana	there is 存在動詞	shadow 影をみた	mbah jenggot/baureksa	old man with beard/ancestor
		voice 声を聞いた	buta ijo	yellow monster
		(cigarette smoke) 煙草の煙	memedi	a small human like spirit
'rungu' 聴くの派生形				
keprungu	heard	voice of spirits 精霊の声を聞く		
cf. krungu	hear/heard			
vt. rungungu	hear			
di-form (passive)				
diwedeni	to be threatened	会話をした	memedi	a small human like spirit
dikandhakake	to be told	会話をした	memedi	a small human like spirit
di-elingake	to be warned/advised	忠告を受けた	simbah	grandfather
di-weruhi	to get to know		thuyul	a small child-like spirit

Choice of verb is parallel to the proximity of the writers/speakers to spirits //lelembut

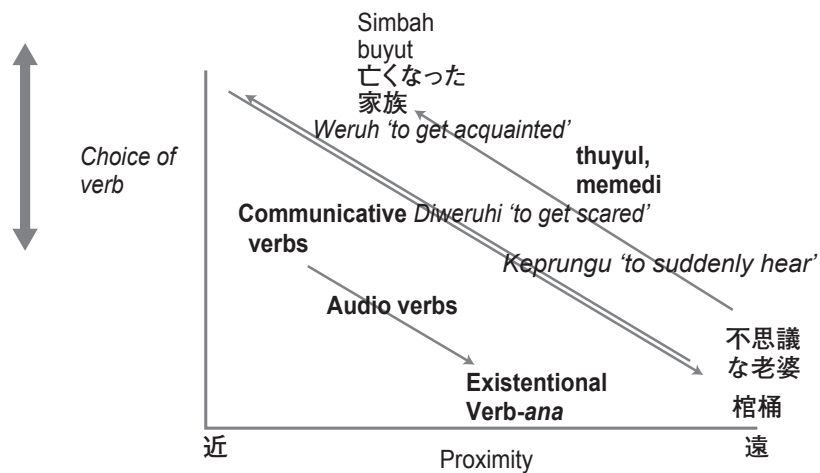


図 1 : 話し手の使う動詞と Lelembut との関係

di-eling-ake「忠告を受けた」などの経験を語り、そこには恐れや感情はない。Lelembut は、nanimate<->inanimate, human-like<->non-human-like の軸に沿って、その特徴を分けることができる。今回はわずか 20 ほど

の体験談を考察したものである。極めて多様なジャワの lelembut についての語りの研究は始まったばかりである。

References

- Du Bois, John W., 1986. Self-evidence and ritual speech. *Evidentials: The Linguistic Coding of Epistemology*, ed. by W. Chafe and J. Nichols, 313-333. Norwood, NJ: Ablex.
- Du Bois, John W., Stephan Schuetze-Coburn, Danae Paolino, and Susanna Cumming, 1992. *Discourse Transcription*. Santa Barbara Papers in Linguistics, vol. 4. Santa Barbara: University of California, Santa Barbara.
- Helberg, Nancy, 2013. Applying the Givenness Hierarchy Framework: Methodological Issues, ILCAA workshop
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DATA
Magazines *Djaka Lodang*
Narratives narrated by A, B.